

中高 6 学年の語彙学習方略に関する横断的検討 —方略使用パターンと個人差要因に着目して—

内田奈緒（東京大学大学院）

キーワード：学習方略、英語、語彙学習

問題と目的

外国語の語彙を運用するには多くの深い知識が必要であり、学習者自身の語彙学習の質が重要である（e.g., Schmitt, 2008）。先行研究では、単語を他の情報と関連づける等処理の深い方略をはじめ多様な方略の使用と学習成果の関連が示されてきた（e.g., Fan, 2003; Gu & Johnson, 1996）。

使用する方略やその適応性は学習段階によって変化すると考えられるが、語彙学習方略の変化についてはほとんど知見が蓄積されていない（Gu, 2010）。また、複数の方略の使用パターンから学習の質を捉え、背景にある信念や動機づけを探ることも重要だと考えられる。

そこで本研究は、中高 6 学年における語彙学習方略の使用パターンおよびその特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には、中学 1 年～高校 3 年生を対象に横断的な調査を行い、方略使用パターンと個人差要因を比較する。

方 法

調査参加者 中 1～高 3 の計 537 名（各学年 79, 75, 79, 105, 86, 113 名）。県立中高一貫校および高校は私立 1 校を含む。偏差値はともに 60 程度。
質問紙 ①語彙学習方略、②英単語学習観（語彙学習に対する信念）、③英単語学習目標（語彙学習における動機づけ）を測定した。①は小山（2009）など先行研究の項目を援用し、②③は内田（2018）のインタビューをもとに項目を作成した。

語彙サイズ 参加者の語彙数を推定するため、語彙サイズテスト（相澤・望月, 2010）を実施した。

結果と考察

下位尺度 各尺度について探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行ったところ、以下の因子が抽出された。

- ①語彙学習方略：関連づけ方略、場面想起方略（単語を使う状況を作る・想像する）、反復方略
- ②英単語学習観：ニュアンス把握志向（単語の表す意味の理解を重視）、対連合暗記志向（単語と訳の暗記を重視）
- ③英単語学習目標：テスト動機（知識の再生が目標）、活用動機（様々な文脈での活用が目標）

方略使用パターン 方略の下位尺度の標準化得点を用いてクラスタ分析（ウォード法）を行った。Upper tail 法（Mojena, 1977）も参照して 5 群に類別した。各群の方略得点を Figure1 に示す。

A : 全体的に平均をやや上回る群

B : 反復は平均を下回り、関連づけ・場面想起（深い方略）は平均的な群

C : 反復は平均を上回るが深い方略は少ない群

D : 深い方略の使用が特に多い群

E : 全体的に方略使用が少ない群

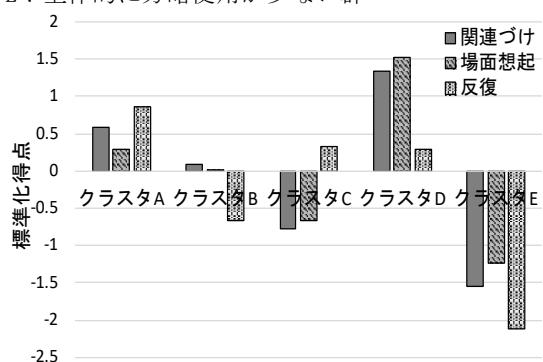


Figure 1 各クラスタの方略標準化得点

反復に偏る C、深い方略を多く用いる D という対照的な 2 群に焦点を当てる。Figure2 は CD の学年ごとの人数の割合である。C は高い値も取りつつ増減する一方 D は中 2 以降 20% に満たない。しかし語彙サイズは C が少なく、中 1 ではまだ差は小さいが、高 3 では CD 間に有意差が認められた ($p < .01$)。信念・動機づけに着目すると、C はニュアンス把握志向や活用動機が低く、D はそれらが高かった。つまり、学習が進む中で深い方略も多く取り入れていく必要があり、そうした学習者は、単語の表す意味を理解する志向性や知識の活用を見据えた動機づけが高いという特徴がある。これらの要因にも考慮しつつ適応的な方略使用を促す指導が必要だと考えられる。

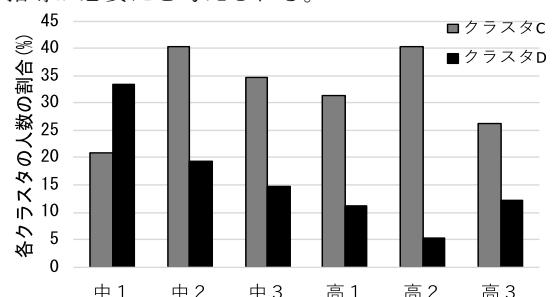


Figure 2 学年ごとの CD の人数の割合